

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

名訳

山岡洋一

- 村上博基訳『女王陛下のユリシーズ号』

本だからこそその感動、それをわずか800円強で何度でも味わえる。本書の迫力を支えているのが村上博基の名訳である。

私的ミステリ通信（第3回）

仁木めぐみ

- ^{ミステリー}神秘の国エジプト

今回は「夏休みエジプト特集」。エジプトを舞台にしたミステリを紹介。悠久の地に思いをはせて、日本の夏の蒸し暑さをしばし忘れてみてはいかがでしょうか。

出版の現状

山岡洋一

- 原点に戻る

テレビに取り上げてもらおうなどと考える必要はない。短く、分かりやすく、読みやすい本にしようなどと考えることはない。本には本の良さがある。本の良さを活かして、ほんとうに内容のある本、新しい時代に良書と呼ばれる本を作っていければいい。

誰も教えてくれなかった英語（第6回）

柴田耕太郎

- andとカンマと記号の混ざった文章

andとカンマと記号の意味さえきちんと知っていれば、どんな英文も怖くない。今回は3つの難文に挑戦してみよう。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

村上博基訳『女王陛下のユリシーズ号』

じつは、この小説には不満が2つある。どちらも原著者や訳者ではなく、訳書の版元に対する不満だ。

第1はタイトルだ。第2次世界大戦に題材をとった物語なのに、なぜ「女王陛下の」なのか。原題はHMS Ulysses だから「英国軍艦」か「国王陛下の」でなければならないはずだ。当時はジョージ6世の時代であり、エリザベス2世はまだ即位していない。大ヒット映画の『女王陛下の007』にあやかるとはならないのと不満になる（実際には、『女王陛下のユリシーズ号』の邦訳出版は『女王陛下の007』の公開よりも早いので、あやかっただけではないのだが）。

第2は「海洋冒険小説」の代表作とされていることだ。特攻にも似た罔作戦でほんの数人を除く全員が戦死し、護衛していた船団もほぼ壊滅する物語がなぜ、「冒険小説」なのだ。本書に似た本は何かと考えたとき、『白鯨』を思い浮かべることもあるだろう。エイハブ船長役はヴァレリー艦長、イシュメールに似てユリシーズ号の物語を伝える役割を担うのがニコルス軍医大尉だ。だが、まず頭に浮かぶのは吉田満の『戦艦大和ノ最期』ではないだろうか。もちろん小説ではないが、物語も印象も似ている。「徳之島ノ北西二百哩ノ洋上、「大和」轟沈シテ巨体四裂ス 水深四百三十米 今ナオ埋没スル三千ノ骸 彼ラ終焉ノ胸中果シテ如何」。これを「冒険」などと呼ぶものがあるだろうか。だったら、『女王陛下のユリシーズ号』も「海洋冒険小説」ではありえないのではないだろうか。

こんな点に不満をもつのは、『女王陛下のユリシーズ号』の感動が大きかったためだろう。小説はこうでなければと思える名作なのだ。映画でもテレビでも、ここまでの感動はおそらく味わえない。本だからこそこの感動、それをわずか800円強で何度でも味わえるのだから、これほど安上がりでこれほど贅沢な時間の過ごし方はない。

本書の迫力を支えているのは、いうまでもなく何よりも原著の凄まじい物語と引き締まった文章だが、それと少なくとも同等に寄与しているのが村上博基の名訳である。

じつはこの本ははるか以前に紹介しようと考えてい

た。ところが、本棚をいくら探しても原著がでてこない。たぶん、誰かに貸したままになっているのだろう。そこでもう一度買おうとしたが、絶版になっていて手に入らない。マクリーンの代表作なのに、原著が手に入らないのだ。ようやく入手できたのは、大活字版だった。訳書はハヤカワ文庫で簡単に買えるのだから、現時点では原著より訳書の方が読まれていると考えて間違いはない。この一点をみても、村上博基の翻訳がいかに優れているかがわかる。

翻訳の特徴や質をみるには、冒頭部分の原文と訳文を比較するのがいちばんいい。冒頭はどの著者もどの訳者もいちばん力をいれる部分だし、いちばん時間をかける部分だ。それに前がないので、訳文が文脈の影響を受けることがない。前の流れがどうだったかを無視して翻訳の質を考えられるのは冒頭部分しかない。そこで、冒頭部分の原文と訳文を比較してみよう。

Slowly, deliberately, Starr crushed out the butt of his cigarette. The gesture, Captain Vallery thought, held a curious air of decision and finality. He knew what was coming next, and, just for a moment, the sharp bitterness of defeat cut through that dull ache that never left his forehead nowadays. But it was only for a moment -- he was too tired really, far too tired to care. (Alistair Maclean, HMS Ulysses, Compassion Press, p. 1)

おもむろに、もったいぶって、スターは煙草をもみ消した。ヴァレリー艦長はその仕種に、なんとなく決断と最終的態度があらわれているように思った。彼はつぎになにがくるかを知って、すると一瞬、ひりりと刺すようなにがい敗北感が、このところ前頭部から消えぬ鈍痛のあいだをつらぬいた。が、それもほんの一瞬だった。彼は疲れていた。意に介するにはあまりに疲れていた。(アリステア・マクリーン著村上博基訳『女王陛下のユリシーズ号』ハヤカワ文庫、15ページ)

「おもむろに、もったいぶって」だけでももうぞくぞくするような訳文だ。原文が Slowly, deliberately であるのを見ると、村上博基の筆の冴えは信じがたいほどだと思えてくる。ふつうなら「ゆっくりと慎重に」だろうか。試みに、第1文を「ゆっくりと慎重に、スターは煙草をもみ消した」にしてこの段落を読んでもいい。それだけでぶち壊した。それだけで、500ペー

ジ近くもある小説を読もうとは思えなくなる。

「おもむろに」は思いつけないわけではないが、普通の英和辞典にはない訳語だ。もうひとつの「もったいぶって」はそう簡単に考えつく訳語ではない。だが、村上博基の訳文を読んだ後で考えると、もうこれ以外にはありえないと思える。Slowly, deliberately は「おもむろに、もったいぶって」と訳す以外にない。そう思えるのだ。コロンブスの卵のようなもので、いわれてみればそれしかありえないのだが、ちょっとやそつとで思いつけるものではない。翻訳はこうでなければいけない。

この deliberately が slowly の類語であることにも注目したい。ここで原著者はほぼ同じ意味の副詞を2つ並べて、意味を強めているのだ。だから、日本語という観点に立つなら、「おもむろに、もったいぶって」としなくても、「おもむろに」だけでもよかった。日本語の本来の生理では、このように形容詞や副詞の類語を並べる方法はあまり使わない。だが、村上博基は律儀に訳している。ここだけではない。小説全体で一語一句を丁寧に訳している。

翻訳というものの目的を考えるなら、原文の内容を、思想を、論理を、感情を母語で伝えるために必要だと考えることをすべて行うのが翻訳者の責任である。この責任を果たすには、原文の一語を二語で訳そうが、十語で訳そうが、一ページで訳そうが、逆に、原文の二語を一語で訳そうが、十語を一語で訳そうが、一ページを一語で訳そうが、翻訳者に自由が認められていなければならない。不必要な表現は削り、必要な表現を加えることぐらいは、翻訳者の自由でなければならない。だが、日本が後進国だった時代には、翻訳者にそのような自由は許されていなかった。翻訳者は原文の一語一句を忠実に訳していくものとされていた。先進国の仲間入りを果たしたと胸をはるようになって、翻訳についてのこの見方は変わっていない。いまでも翻訳の発注者には、翻訳書の編集者には、原文の一語一句と訳文とをつきあわせて抜けがないようにするのが自分の役割だと考えている人が少なくない。

原文の一語一句を丁寧に訳してほしいといわれると、翻訳者は困惑することが少なくない。英語と日本語は違うのだといいたくなる。英文和訳と翻訳は違うのだといいたくなる。そういう苛立ちを感じたとき、村上博基の翻訳を原文と比較しながら読むと、救われるように思う。たとえばこの『女王陛下のユリシーズ号』がそうだが、原文の一語一句をひとつも落とさず、何

も加えず、丁寧に訳していく。それでいて、翻訳であることを忘れさせるように自然な日本語を書く。

原文の内容、思想、論理、感情に忠実であろうとすれば、原文の一語一句に拘泥するわけにいかないとも思う。だが、村上博基の翻訳を読むと、原文の一語一句を忠実に訳すことによって、原文の表現を見事に母語で再現できるのだと気づかされる。そのために必要なものはもちろん、半端ではない。英和辞典にある訳語には頼らず、たとえば Slowly, deliberately を苦もなく「おもむろに、もったいぶって」と訳せる日本語力である。

もうひとつ、『女王陛下のユリシーズ号』について触れておきたい点がある。この訳書が出版されたのは1967年だ(文庫版はその5年後の1972年に出版された)。村上博基は1936年生まれだから、30歳か31歳のときの翻訳なのだ。もちろん、過去の例をみれば、もっと若い年齢でいまに残る名作を書いた作家が何人もいる。だが、翻訳という仕事は違うと思う。30歳といえ、まだせいぜい二葉にすぎない。二葉より芳しといえ、それまでだが、30歳でこれだけの仕事をした翻訳家がいることを、若手の翻訳者に是非知っておいてもらいたい。

ROUTE 66 A.D.

海外ツアーは
ローマ時代に
始まった!

2000年前のロードマップを手に
当時の観光ルートを巡る異色の歴史紀行。
ローマからギリシア、トルコ、エジプトへ。
道中でお会い、娼婦、泥棒、見世物小屋……
人の好奇心は昔も今も変わらない。

人類史上初のツアー旅行体験記
トニー・ペロテット 仁木めぐみ(訳)

歩いた地中海

ローマ人が

2000年の時空を超えた好奇心いっぱいの旅 ●2,600円＋税
4-334-96157-6

光文社 〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
<http://www.kobunsha.com>

ミステリー

神秘の国エジプト

暑中お見舞い申し上げます。8月配信の第3回は「夏休みエジプト特集」です。エジプトの灼熱の大地と、神秘をたたえるナイル川に思いをはせて、日本の夏の蒸し暑さをしばし忘れていただければと思います。

エジプトとミステリー。これほど相性のいい言葉もなかなかないでしょう。エジプト・ツアーのパンフレットには必ず神秘、冒険、ロマン、謎といった言葉が踊っていますし、ピラミッドやスフィンクスなどの歴史的建造物は見る人の好奇心をいやでもかきたてます(……と言っても実は私はエジプトに行ったことがないのですが)。

エジプトは、映画の舞台にもよく選ばれ、最近でも『スター・ゲート』や『ハムナプトラ』など、エジプトを舞台にした映画はシリーズものになるほどの人気です。私事で恐縮ですが、昨年、江戸東京博物館で開催された「古代エジプト文明展」を見に行ったのですが、会場は老若男女、あらゆる人で込み合っていました。古代エジプト文明の謎については、誰もが興味津津なのでしょう。

しかしエジプトを神秘の国であることには、実はピラミッドが作られた頃よりもだいぶ後の時代のエジプト人の意志も深くかかわっています。西欧の人々は日本人以上に古代エジプト文明には強烈にひきつけられています。これは西洋文化の源、古代ギリシア・ローマ時代から始まっていることです。

古代ギリシア・ローマ時代、エジプトはすでに観光地でした。神秘の国エジプトを見ようと張り切ってやって来たギリシア・ローマ人たちは、自分たちの国よりもはるかに古く、はるかにスケールの大きな文明の遺跡に度肝を抜かれたのです。

ヘロドトス、プルタルコス、ストラボンなどそうそうたる人々もエジプトに行き、畏怖と感動に身を震わせたのです……しかし！ 彼ら善良なるギリシア・ローマ人たちが信じ、後世の西洋世界に伝えたエジプトの伝説は、ほとんどが当時のエジプト人ガイドらが並べた嘘八百だったのです。

その荒唐無稽さたるや尊敬してしまいそうなほどで

す。あの「イソップ物語」の作者であるギリシア人イソップとエジプトのファラオはある娼婦を取り合っていたが(イソップもびっくりでしょう)、その娼婦の墓があつたピラミッドだと言っていたり、なんでもないただの古い家を哲学者プラトンが住んでいた家だと言って、書斎を公開(!)したり、ホメロスはエジプトの神官の息子なのだと語ったり(イソップもプラトンもホメロスもみんなギリシア人で、おそらくエジプトには行ったこともないでしょうし、時代も全くあいません)、まさに時空を超えたでたらめを並べていたのです。

あの『英雄伝』を書いた偉大なるプルタルコスなど、かわいそうにエジプト人の言うことをすっかり信じ込んでしまい、エジプトの神々は実はギリシアの神々と同じだったという『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』(柳沼重剛訳、岩波書店)という本まで書いてしまいました。

これらはみな当時のエジプト人が、大挙してやってきては大金を落としてくれる観光客をカモにするために口からでまかせに言ったことなのです。無邪気に感動していたギリシア・ローマ人たちにとって、エジプトは現地に行って話を聞けば聞くほど、謎に満ちた神秘の地となっていくたのでした。

そしてギリシア・ローマ人たちのエジプト好きは西洋世界に脈々と受け継がれていきます。そして時は流れて二十世紀、エジプトがイギリスの植民地となっていた時代、また新たなるエジプト考古学ブームが興り、あの有名なツタンカーメンのミイラの発見につながったのでした。

1922年、ハワード・カーターによるツタンカーメンのミイラの発見は一大センセーションを巻き起こし、さらに発掘に続いて次々とおこった関係者の謎の死(これについては自然死と思われるものも多く、信憑性はいささか疑わしい)は、「ファラオの呪い」としてヨーロッパ中を震撼とさせました。

その「ファラオの呪い」を事件を念頭において書いたのではないかと思われるのが、カーター・ディクスン(言うまでもなくジョン・ディクスン・カーの別名です)が1945年に発表した『青銅ランプの呪い』(後藤安彦訳、創元推理文庫)です。

エジプトから持ち出した者には必ず呪いがかかると言われている青銅のランプをイギリスに持ち帰った令嬢が忽然と姿を消してしまうという、「人間消失」もののミステリで、おなじみのヘンリ・メルヴィル卿が探偵役として活躍します。怪奇的な雰囲気盛り上げながらも、どこかからりとして読後感のいい、カーらしいミステリです。

カーの作品は最近も書店にもたくさん並んでいるのですが、この『青銅ランプの呪い』は現在、邦訳の入手が困難になっているようで残念です。

ツタンカーメンのミイラが発見された頃、つまり二十世紀の前半といえば、それはまさに本格ミステリ黄金期の真っ只中でした。カーのみならず、他の黄金期の巨匠たちも、当時タイムリーだったエジプトという舞台を見逃してはいません。

エラリー・クイーンの国名シリーズの中の一冊『エジプト十字架の謎』（井上勇訳、創元推理文庫／『エジプト十字架の秘密』宇野利泰訳、早川文庫）は、残念ながらエジプトが舞台ではありませんが、アガサ・クリスティはエジプト旅行中のイギリス人たちの間におこる殺人を描いた『ナイルに死す』（加島祥造訳、ハヤカワミステリ文庫）を書きました。これは日本でも公開になった映画『ナイル殺人事件』の原作です。

『ナイルに死す』は考古学者である夫に同行し、毎年のように中東を旅していたクリスティが、当時のエジプト（にいるイギリス人たち）の雰囲気をいきいきと伝えたミステリです。

事件は美人で巨額の財産を持つ令嬢が、新婚旅行先のエジプトのナイル・クルーズの船の上で殺されるといふものです。はなやかな舞台設定としっかりとした人物描写で最後まで落ちていて読ませてくれるミステリです。

事件の謎自体はそれほど意外性のあるものではないのですが、イギリスの上流階級の人々のある意味無邪気で、ある意味鼻持ちならない実体を、舞台をエジプトに据え、ベルギー人の探偵ボワロを配することによって、くっきりと浮かび上がらせているところは、クリスティの面目躍如という感じです。もちろんクリスティはイギリス人なわけですから、この自己洞察のするどさには頭が下がります。

『オリент急行殺人事件』（長沼弘毅訳、創元推理文庫／中村能三訳、ハヤカワミステリ文庫）や『メソポタミアの殺人』（高橋豊訳、ハヤカワミステリ文庫／『殺人は癖になる』厚木淳訳、創元推理文庫）など海外を舞台にしたミステリを多く描いたクリスティは

旅が大好きだったのでしょう。『ナイルに死す』にはこんな前書きがついています。

『ナイルに死す』は私がエジプトから帰ってすぐに書きあげたものです。いま読み返しても、自分がふたたびあの遊覧船に乗ってアスワンからワディ・ハルファまで旅をしているような気持ちになります。……（中略）……自分では、この作品は“外国旅行物”の中で最もいい作品の一つと考えています。そして探偵小説が“逃避的文学”だとするならば、（それであって悪い理由はないでしょう！）読者はこの作品で、ひとときを、犯罪の世界に逃れるばかりではなく、南国の陽差しとナイルの青い水の国に逃れてもいただけるわけです。（加島祥造訳）

まさにその通りです。“それであって悪い理由はないでしょう！”だから安心して日々の憂さを忘れ、ナイルの水の上を漂うことにしましょう。

どうせエジプトに“逃避”するならば、いっそのこと時間も飛び越えてしまいたい、そう思われる方には、古代エジプトの事件の謎を究明するミステリもあります。

キャロル・サーストン（Carol Thurston）の *The Eye of Horus* は、紀元前十三世紀の「殺人事件」の謎を現代のアメリカ人女性が解明するミステリです。医学専門のイラストレーター、ケイトは、最近発掘されたミイラを描く仕事を依頼されます。そのミイラは女性で、生前に肋骨と左腕が折られ、足の裏の皮膚を切り取られた他殺体であり、しかも両足の間には男性の頭蓋骨が置かれていたのです。このミイラに何故かとても心を惹かれたケイトは、その死の真相を調査し始めるのです。

題名の *Eye of Horus*（ホルスの目）はエジプトの神ホルスの目を具象化した図のことで、古代エジプトでは医学のシンボルになっていました。ストーリーは古代の部分と現代の部分が並行して進行していきます。古代の部分は青年医師テンレの日記という形になっていて、ミイラになった女性、ネフェルティティの娘アセットの短い生涯を、アセットを愛したテンレの目を通して語っています。一方、現代の部分ではケイトが古代の事件の真相に近づいていく過程と、恋愛に臆病なケイトが調査を通じて医師マックスと知り合い、ためらいながらも愛情を育てていく様子が描かれています。アセットとケイト、テンレとマックスのイメージが重なり合い、時空を超えた二組の男女の心が少しずつ近づいていく様子を交互に語っているところは、なかなか秀逸です。

アセットが生きた時代はツタンカーメンからラムセス 世まで、つまり宗教改革や政変があいついだ頃でした。ネフェルティティ、ホレムヘブ、ラムセスなどオールスター・キャストが登場するところも魅力です。美しく冷たいネフェルティティなど、性格設定はやや“お約束”どおりですが、権謀術策うずまく権力闘争はこの作品のもう一つの核になっています。

また、この時代は人間らしい文化が開花した時代でもあったので、自分を信じ、前向きに生きたアセットには似つかわしい時代だったと言えるでしょう。

作品の結末についてはここでは詳しく語ることはできませんが、読後感は感動とカタルシスに満ちていた、とだけ申し上げておきましょう。

The Eye of Horus は時空を超えた感動巨編ですが、次はもう少しエンターテインメント性の高いシリーズものをご紹介します。

[リンダ・S・ロビンソン](#) (Lynda S. Robinson) のメレン・シリーズです。舞台はツタンカーメン時代のエジプトで、主人公で探偵役のメレンは、年若き王ツタンカーメンの「目と耳」、つまり密偵として様々な事件を捜査します。

シリーズは現在第6作まで進んでいますが、残念なことに日本ではまだ一冊も翻訳が出ていません。作者のロビンソンは考古学の学位を持っていて、スザンヌ・ロビンソンという別名で歴史ロマンスも書いているようです。

メレンは温厚な人物ですが、ツタンカーメンが即位する前、先王のアクエンアテンに屈辱を味あわされたという過去もあります。そんなメレンが、陰謀のうずまく王家の中で健気に国を治めている少年王ツタンカーメンに抱く忠誠心と半ば保護者めいた愛情にはなかなかほろりとさせられます。また幼い頃からメレンが養子として育てていて、いまやメレンの右腕になっているカイセンとの交情も心あたまるものがあります。

メレンやカイセンに限らず、登場人物の性格設定は現代的でわかりやすく、親近感をもてます。作者ロビンソンは考古学の学位を持っているというだけあり、メレンやカイセンの日常生活の部分を丁寧に描いているおかげで、リアリティを感じられるせいもあるでしょう。

1作目 Murder In the Place of Anubis は、神聖なるアヌビス神殿で行われていたミイラの防腐処置に、よけいな他殺体が紛れ込んでいたことから始まります。折から神官たちがツタンカーメンに対する反乱をたくら

んでいるといううわさがあり、政情は不穏です。メレンはツタンカーメンを守るためにも捜査に乗り出します。殺人、窃盗、横領と現代にもある犯罪と共に、古代エジプトならではの犯罪も登場します。これはまだミイラにするためのちゃんとした処置をする前の死体を破壊し、魂が永遠に再生できないようにするという殺人よりも恐ろしい犯罪なのです。

2作目の Murder At the God's Gate では、今度はある神官がツタンカーメン王の彫像のてっぺんから墜落死します。他殺なのか、事故なのか、それとも何かの呪いなのか……。ちょうどヒッタイト族がエジプト国境に迫り、ツタンカーメンと政敵アクナートンとの間の緊張も高まっていて、メレンはまたもや王と祖国を救うため、事件の謎を解かなければならないのです。

シリーズ4作目までは、舞台が過去に設定されているという意味の歴史ミステリでしたが、5作目からはリチャード 世の真の姿を推理したジョセフィン・テイ『時の娘』（小泉君子訳、ハヤカワミステリ文庫）の系譜に連なるともいえる、歴史の真実をさぐるミステリにシフトしています。

それまではほぼ「一話完結」という形で事件の捜査にあたっていたメレンですが、5作目 Drinker of Blood と最新作 Slayer of Gods では、一貫して、先王アクエンアテンと妃ネフェルティティの秘密を追っています。アクエンアテンはなぜ突然首都を遷都し、一神教に宗教改革をしようとしたのか。そして過労と心労で死んだと言われているネフェルティティは本当は何者かに毒殺されていたのではないかと。メレンは恐ろしい真相を知りますが、まだ18歳のツタンカーメンにどう告げるべきかと悩んだりもします。

そして息子カイセンにも危険がおよび、メレンは愛する者たちを守るために戦わなければならないのです。

エジプトを舞台にしたミステリはエリザベス・ピーターズの Amerlia Peabody シリーズなどまだまだ他にもたくさんあります。今年の夏、クーラーの効いた室内で壮大なロマンを楽しんでみてはいかがでしょうか。

リンダ・S・ロビンソンの作品リストを[翻訳通信のサイト](#)に掲載しました。URLは以下の通りです。

<http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/my/dt/lsr.html>

原点に戻る

先月号の「統計にみる出版不況」についていくつかの反響があったが、なかでも目立ったのは「今年前半はもっとひどい状況だ」と話してくれた出版関係者が多かったことだ。出版の市場規模が縮小するなかで出版点数が急増する現象が、今年は去年よりさらに鮮明になっているというのだ。出版不況が長引いている現状では、市場の状態が急激に悪化しても不思議ではないし、悪いことだとも言い切れないように思う。出版各社が危機感を募らせれば、新しい動きがでてくる可能性もあるからだ。「命がいくばくもないことが分かれば、神経を一点に集中できるようになる」と、サミュエル・ジョンソンも語っている（これも、あのボズウェルが伝えた言葉のはずだ）。

先月号では、出版業界の統計を使って、「本が売れない 新刊点数を増やす 本がますます売れなくなる」という悪循環に陥っていることを確認した。しかし、悪循環を確認しただけでは問題は解決しない。統計では分からない点、そもそもなぜ本が売れなくなったかを考えなければならない。

本が売れなくなったという点では、出版関係者の意見は一致している。ごく少数の大ヒットはあるが、それ以外はさっぱり売れない、とくに良書が売れないという。以前なら着実に売れていた良書が売れなくなった。いま売れているのは、テレビのワイドショーで取り上げられる本だけだ。だからタレント本やトンデモ本に頼るしかなくなっているのだと。

なぜ良書が売れなくなったのか。若者の活字離れとか、新古書店とか、携帯に食われているとか、本が売れない理由としてよく耳にする話では、この点は説明できない。新古書店で売られているのはいわゆる良書ではないし、若者のなかでも活字離れといわれている層や、携帯に小遣いを使い果たす層はもともと、いわゆる良書の読者だとは考えられていないはずだ。

ではどこに原因があるのかと考えていくと、根っこはノーパンしゃぶしゃぶにあるといいくなる。いや、ふざけているのではない。ノーパン何とかで本が売れなくなったというのは、風が吹けば桶屋が儲かるどころではない荒唐無稽な話だと思われるだろうが、結構まじめにそう考えている。なぜそう考えるのか、少し

説明してみよう。

そもそも、良書とは何か。良い本だろうというのは答えにならない。良書とは良い本ではない。良いといわれてきた本だ。なぜ良いといわれてきたのか。内容が良いからか。そういう場合もあるだろうが、たいていはそうではない。そこまで深く考えて良書とそれ以外を区別していたわけではない。はるかに簡単な基準で区別されていた。権威という基準だ。権威ある地位の人が書いた本か、権威ある地位の人が薦める本が良書とされてきたのだ。

権威ある地位の人が書くか薦めた本が良書だということ、いかにも馬鹿げていると思えるかもしれないが、そんなことはない。ある人が権威ある地位につくのは、もともと、優れた本を書けるほど、あるいは選べるほど優れた人だったからだ。優れているから権威があると世間に認められるようになり、権威ある地位についたのだ。まず内実があり、その結果として地位が与えられ、権威が認められるようになる。

ところが、時代の移り変わりとともに内実と地位が乖離することがある。内実がない人物が権威ある地位につくこともあるし、もともとは内実があった人物でも、権威ある地位に安住して腐敗堕落してしまうこともある。内実と地位が乖離していても、世間はそう簡単にはその事実には気づかない。だから、地位に伴う権威がいつまでも通用することがある。

権威というと、それだけでおぞましいものとも考える人もいるだろうが、問題は権威の中身であって、権威そのものではない。しっかりした権威がなければ、世の中はうまく動かない。

その典型例が政治だ。日本の政治は民主主義という原則のもとで動いていることになっているが、民主主義は現実的とはいえない想定に基づいていると思える。何年に1回かではあるが、子供を除く国民が全員、各政党と候補者の主張と行動を慎重に調べ、合理的に判断し、誰に政治を託すかを理性的に選択することになっている。だが現実的に考えてみれば、そのような選択をするために時間とエネルギーを使えるほど暇な人がそうたくさんいるわけではなし。有権者は賢明だ

から、自分の一票で日本の政治の方向が決まるなどという幻想をもっていない。現実的に考えれば、信頼できる人たち、つまり内実を伴った権威のある人たちに政治を任せるしかない。そして日本国民は戦後、権威ある人たちに政治を任せる方法をとってきた。任せた相手は政治家ではない。官僚だ。政治家はお飾りでいい。官僚が優秀だし、しっかりしているので、政治家をうまく誘導してくれるはずだ。だから、選挙はどうでもいい。現実的に考えれば、選挙はせいぜいのところ、地元と支持者の便宜をうまくはかってくれる人を選ぶだけのものでいい。こう考えられるのは、官僚の権威が内実を伴ったものだという安心感があったからだ。

そこに登場したのがご存じテリー伊藤だ。たった一言、ノーパンしゃぶしゃぶと叫ぶだけで、誰もなしえなかったことを達成した。官僚のなかの官僚、大蔵官僚の権威を木々端みじんに砕いてしまったのだ。権威に内実が伴っていないことを一言でさらけだした。この一言で、戦後の日本を支えてきた数々の権威のうち、最後まで残っていた官僚の権威が地に落ちた。

先生と呼ばれる人たち、小学校から大学までの教師や、医師、弁護士などの専門家や、政治家、評論家などの権威はすでにかなり以前から揺らいでいるか、地に落ちていた。企業経営者の権威も落ちていたし、とくに銀行などの金融機関の権威はバブル後の惨状でまったくなくなっていた。そして、ノーパンしゃぶしゃぶだ。権威というものを誰も信用しなくなったのも、驚くには値しない。

権威とされてきたものがすべて信認を失った時代に、権威を裏付けにしてきた良書が売れなくなったのは当然であり、驚くようなことでも嘆くようなことでもない。良書が良い本であるとはかぎらないことに読者が気づいただけの話なのだから。そういうわけで、ノーパンしゃぶしゃぶの一言で、良書と呼ばれてきた本が売れなくなったということもできる。

だが、権威とされてきたものがすべて信認を失ったとき、世の中はどうなるのか。歴史を少しでもかじったものなら、どうなるかを知っている。それまでの権威が内実を伴わない偽物だったことが白日のもとにさらされたとき、内実を伴った新しい権威が確立するまでの間、世の中は混乱する。魍魎魍魎の活躍する世界、百鬼夜行の世界になる。日本の現状はまさにそうだ。政治の世界でそれが目立つのは、官僚の権威という支えがなくなったためかもしれない。マスコミの世界で

それが目立つのは、学者や評論家が信用されなくなったからかもしれない。こういう現状を考えれば、出版の世界でタレント本かトンデモ本しか売れないのも当然のように思える。

魍魎魍魎の活躍する世界、百鬼夜行の世界は、内実を伴った新しい権威が確立するまで続くだろう。では、新しい権威はどのようにして確立されていくのか。このように視点を切り換えたとき、出版という世界、そのなかでも翻訳出版という世界に少しでも関与していたのはつくづく幸運だったと思える。新しい権威の確立のためには、まず古今東西の優れた考え方を学ぶ。とくに外国から学ぶか、半ば忘れられてきた古い時代から学ぶ。いつの時代にも、混乱期にはかならずこの方法がとられてきた。そして、外国から学ぶにしても、古い時代から学ぶにしても、書籍ほど優れたメディアがあるとは思えない。なかでも、翻訳書ほどすぐれた方法があるとは思えない。出版業界は、いまの時代の要請にこたえられる最高のメディアを握っているのだ。

テレビに取り上げてもらおうなどと考える必要はない。短く、分かりやすく、読みやすい本にしようなどと考えることはない。本には本の良さがある。本の良さを活かして、ほんとうに内容のある本、新しい時代に良書と呼ばれる本を作っていけばいい。

信頼の知識リソース Japan Knowledge

ジャパナレッジ.com



「重たい事典や辞書の引き比べ、肩がこって仕方ない…」
「百科事典も国語辞書も英和辞典も人名事典も、必要だけど置き場所がない！」

「インターネットの情報検索って、ごみが多くて選り分けるのが大変」

そんなあなたに…

日本最大の知識探索サイト
ジャパナレッジ.com

をお薦めします。

ご入会・お問い合わせは下記 URL へどうぞ。
<http://www.japanknowledge.com/>

JapanKnowledge.com

(C)株式会社ネットアドバンス <http://www.netadvance.co.jp>

and とカンマと記号の混ざった文章

and とカンマと記号の意味さえきちんと知っていれば、どんな英文も怖くない。

うるさいほど and が重ねられ、ねちこい文体に仕上がっているヘミングウェイの作品。東大の学生にやらせたら一人も歯が立たなかったという、文頭の副詞節がわかりにくいカーライルの『衣服哲学』の書き出し。若手の学者の気負いがダッシュの多用に感じられるシェークスピア論の一節。

それぞれ難文ですが、これまで私の連載をじっくり読んできた人にはきっと読み解けるはずです。やってみましょう。

『武器よさらば』の一節

In the late summer of that year we lived in a house in a village that looked across the river and the plain to the mountains. In the bed of the river there were pebbles and boulders, dry and white in the sun, and the water was clear and swiftly moving and blue in the channels. Troops went by the house and down the road and the dust they raised powdered the leaves of the trees. The trunks of the trees too were dusty and the leaves fell early that year and we saw the troops marching along the road and the dust rising and leaves, stirred by the breeze, falling and the soldiers marching and afterward the road bare and white except for the leaves.

In the ア<late summer> of that year/ we lived in a house in a village (that イ<looked> across the river 1<and> the plain イ<to the mountains>). In the bed of the river/ there were pebbles 2<and> boulders ウ<,> (dry 3<and> white in the sun)ウ<,> 4<and> the water was clear 5<and> swiftly moving 6<and> blue エ<in the channels>. オ<Troops> カ<went by> キ<the house> 7<and> カ<down> ク<the road> 8<and> the dust (they raised) powdered the leaves of the trees. The trunks of the trees too were dusty 9<and> the leaves fell early that year /10<and> we saw オ<the troops marching> along the road 11<and> the dust rising 12<and> ケ<leaves>コ<,> (stirred by the breeze)コ<,> falling 13<and> the soldiers marching 14<and> afterward the road サ<bare> 15<and> white シ<except for> the leaves.

*全単語中 15/126(約 12%)で and が使われているが、意味合いが違ったり、並列でも何と何を結ぶか判りにくいものがある

- 1 the river と the plain を並列
- 2 pebbles と boulders を並列
- 3 dry と white を並列
- 4 ゆるい 順接
- 5,6 clear と swiftly moving と blue を強調的に並列
- 7 by the house と down the road を並列
- 8 きつい 順接
- 9 ゆるい、またはきつい 順接
- 10 前後で視点が変わっている。and の前の節は客観的な事実、and の後の節は個人の目に入った風景。しいていえばゆるい順接だが、and でなくピリオドにしてもよいほど前後の結びつきは弱い
- 11~14 saw 以下に続く 5 つの名詞・名詞句を強調的に並列「通りを部隊が行進する(A)」「埃が立上る(B)」「葉っぱが落ちる(C)」「兵隊が行進する(D)」「道が白っぽく何も無い(E)」
*もっと細かく読むと、12 の前後の結びつきは他より強く、14 の後は前の 3 つの and から自然に導き出された結果ともとれる (A、《B、C》、D、/E)
- 15 bare と white を並列

- ア 「晩夏」
- イ look to 「...に面する」(look は自動詞、望む、向く。to は、方向を示す)
- ウ 挿入で前の pebbles and boulders に掛かる
- エ A and B and C + M(修飾語)で、(1) M が A, B, C に均等に掛かるか、(2) C のみに掛かるか判断に迷うところだが、channel は a)水路、b)川床、c)水流の深水部、のうち、river に a)はなじまない、channels と複数、より c)を探り必然的に修飾関係は(2)「水底が青い」—としたいのだが、何か気になる。こういうときは迷わず英英辞書 LONGMAN に頼る(以下の [] はその該当箇所)
[channel 5 : sea/river b) the deepest part of a river, harbour, or sea passage, especially one that is deep enough to allow ships to sail in] うーん、c)の理解で「淵(の青さ)」ととるのは ships to sail in から難しそう(やはり英英は役に立つ)。然らば、原文を通読してヒントになりそうなどとは探すと...ありました。第 31 章、橋の下で増水した川を描写した箇所。the river ran usually in narrow channels in the wide stony bed ~ (いつもなら石ころだらけの広い川原に幾筋もの細流となっている川が...と読める)。channel は、どの辞書にもなかったが「細流、水流、水の筋、水脈」などとするのがよさそうだ。
そこで修飾関係は、(1) M が A,B,C に均等に掛かる、と断定!
- オ 前の troops は総称用法「軍隊なるもの」後の the troops は具体的な軍の部隊
- カ went by (傍らを通り過ぎる : by は...の側を) and went down (たどって行く : down は...に沿って)
- キ = a house in a village

- ク the と出てくる以上、読者がそうと了解されるべきもので、家の前の道
- ケ dust rising と一緒に the で括られている(因果関係が濃密になる)、と読もうとしたが、不可算名詞と可算名詞がごっちゃになるのはおかしい。この leaves は狭い意味での総称用法(その地域一帯の葉)、踏みこめば作者の心象風景としての葉、ととる
- コ 挿入
- サ 表の意味では「道が裸」だが、作者の心象風景を投影させ、裏の意味「殺風景」ととっても、訳文に違和感なければ可
- シ 道には葉っぱだけ、の意(前のところで、葉が落ちたといっている)、これは道に散り敷いた落ち葉。
*同種のものの区別(例えば狭い道、汚れた道など、道どうし)であれば for はいらない

(原文に即した訳)

その年のおそい夏に、川と平野の向こうに山脈を望む、ある村の一軒に我々は住んだ。川原には陽で白く乾いた小石と玉石があり、川の水は細流となって澄み、速く流れ、青かった。軍隊がその家の横を過ぎて、その道を辿って行き、彼らが上げるほこりが木々の葉っぱに降りかかった。木々の枝の幹もまたほこりっぽくて、葉っぱはその年早く落ち、そうして部隊がその道を行進するのを、ほこりが巻き起こって風に揺すられた葉っぱが落ちるのを、兵隊が行進するのを、そのあと道が葉っぱ以外はなにもなく白くなっているのを、我々は見た。

(ある解説書の訳)

*下線と番号は、解説のため私が入れた

その年の夏も終わるころ、私たちはある村の、川と平野のかなたに山が見える家に住んでいた。川床には小石や丸石が陽の光りに白く乾いていて、水路を流れる水は澄んで速く青かった。軍隊が家のそばを過ぎて街道を通り、木の葉はそのあげるほこりにまみれていた。木々の幹にもほこりがついていて。その年は木の葉が早く落ちた。私たちの目には軍隊が街道を行軍し、土煙があがり、微風にゆすられて木の葉が落ち、兵士が進み、彼らが通過したあとは道は人気がなく白々として木の葉だけが残るのが見えた。

bed の訳語だが、川床 = 河水の流れる地面(広辞苑・電子辞書版)であり、「(石が)白く乾いて」と矛盾する。英語辞書の適訳語欠落か、広辞苑の定義不備か、それとも川床がほとんど干からびているのか? こういう時は和英辞書を引く。川床 川底 river bed, bed (ルミナス和英) / 川床 川底 the bottom of a river; the riverbed; the stream bed. (新和英)。広辞苑の定義はあっているようだ。ならばざぱり、ここで欲しい訳語「川原」であたってみる。川原、河原 a dry river bed (新和英) / 河原、川原 river bank (ルミナス和英)。川原は増水すれば水底になるし、bank には岸边という意味があるから、ここの bed

は「川原」としてよさそうだ

川と水路の関係が、この訳文では読めない。解説工、参照

澄んで青いこともあるのかな、とちょっと疑問。解説工、参照。並列はこれでよさそうだが、日本語らしく語順を変えたい「青く澄んで」

この訳では、家の前の道を通って街道(町と町をつなぐ道)に出る、ようにとれる。解説ク、参照

breeze は、日本のそよ風より強い場合が多く、弱風ぐらいが適当

*そよ風は、gentle breeze, light breeze といったところ。

フランス語だが、マラルメの名高い詩 brize de la marine(肉体は悲し—我は万巻の書を読んだ。逃れる、逃れる、彼方へ逃れる...『海の微風(そよかぜ)』が定訳)の風にしても、どう見ても、そよと吹く風ではない

(モデル訳文)

自分でつくってみてください

『衣服哲学』冒頭部分

Considering our present advanced state of culture, and how the Torch of Science has now been brandished and borne about, with more or less effect, for five-thousand years and upwards; how, in these times especially, not only the Torch still burns, and perhaps more fiercely than ever, but innumerable Rush-lights, and Sulphur-matches, kindled thereat, are also glancing in every direction, so that not the smallest cranny or doghole in Nature or Art can remain unilluminated—it might strike the reflective mind with some surprise that hitherto little or nothing of a fundamental character, whether in the way of Philosophy or History, has been written on the subject of Clothes.

「Considering [our present advanced state of culture] ア<,> 1<and> [{how the Torch of Science has now been brandished 2<and> borne about, (with more or less effect), for five-thousand years 3<and> upwards} イ<,> {how, (in these times especially), not only the Torch still burns ウ<,>(4<and> perhaps more fiercely than ever)ウ<,> but innumerable Rush-lights 工<,> 5<and> Sulphur-matches 工<,> (kindled thereat)オ<,> are also glancing in every direction 力<,> so that not the smallest cranny or doghole in Nature or Art can remain unilluminated}] 」キ<—>ク<it> might strike the reflective mind with some surprise {ク<that> hitherto little or nothing of a fundamental character ケ<,> (whether in the way of Philosophy or History) ケ<,> has been written on the subject of Clothes}.

ア 前の並列部分が長いので、ここまでだよと区切るしるし

- 1 前後の節 [] と [] 部分 (名詞句と名詞節) を並列。
本来並列は、同一の品詞、同一の形、同一の機能を結ぶもの。句と節の並列はちょっと変形 (だからここ、とり損なう人が多そう)
- 2 brandished と borne about を並列
- 3 five thousand years と upwards を並列
*この場合 upward は副詞だが名詞扱い。実際には、and upward でイディオム「またはそれ以上」
- イ 前後の節 { } と { } 部分 (共に名詞節) を並列する and の代わり
- ウ 挿入句のしるし
- 4 付加・強調の and 「しかも」
- エ 挿入のしるし。Rush-lights だけでは心許なかったのか、思いつきで加えた感じ (この文章全体の傾向で、読みにくくしている原因)。前の innumerable は Rush-lights にのみ掛かる
- 5 付加的な and
- オ 長い主部の終了を示すカンマ
- カ so that 節 (「それで...」) が始まるのをはっきりさせるしるし
- キ considering 以下で長く説明の続いた条件 (「」全体が副詞的に it 以下に掛かる) の終了を示すとともに、その条件を総括し結論へと導くしるし
- ク it は that 以下を指す
- ケ 挿入句

(原文に即した訳)

現代はこれほど文化状況が進んでいるのだし、科学のともしびは多少なりとも効果を上げてこの 5000 年以上掲げられつづけ伝えられつづけて来ており、特に近年においては科学のともしびはおそらく今まで以上に赤々と燃えており、かつそのおかげで火がともされた数知れぬキャンドルや硫黄マッチもあらゆる方向できらめいていて自然・人工を問わずどんな小さな裂け目や小穴でもその光明にあずからぬことがなくなっている。こういった諸状況を鑑みれば—哲学の面から歴史学の面からを問わず、今までほとんど衣服という対象について基本的な特性が書かれてこなかったというのは、思慮深い人間をいささか驚かせることであるかもしれない。

(石田憲次・訳)

* 下線と番号は、解説のため私が入れた

我が国の文化の現在進んでいる有様を、そして 学問の炬火がもう 二千五百年以上もの間振りかざされ担ぎ回されて或る程度の効果を挙げていることを、特に近頃はその炬火が、相変わらず、いな恐らく愈愈勢猛に、燃えさかっているばかりでなく、それから火を分けて貰った数限りもない燈心蠟燭や擦附木も亦四方八方に閃いていて、自然界芸術界のどんなにちいさい隙間も小穴も光りの及ばぬ所はないことを、考え

る時には、衣服の題目に関して、哲学の方面でも 歴史の方面でも、基本的の書物が今以て殆ど全く書かれていないことは、心ある人に多少奇異の念を感じさせるのが 当然であろう。

science は、狭義では専門化された研究分野の意味をもち「学問」の訳語を充て得るが、ここでは広義での「自然科学をその代表とする体系化された知識全体」ととるべきだろう。

5000 年の間違い

perhaps は) 確率 50%程度) 確率をいうのではなく、そういうことも「あり得る」に力点を置く () 次に強い言葉がくる場合、語調の緩和に働く。ここは) ととるのが順当

nature and art は、慣用的に「自然と人工」。ここ文頭が大文字になっているので、具体的に「神がつくった自然と人間による製作物」ととる

この history は「歴史学」ととるべき

戦前の書物に時折このような表現をみかけるが、今はしない

この might は(1) 現在の可能性を、遠慮がちにいう、または(2) considering 以下の副詞句に仮定の気持が示される仮定法、と考えられるが、いずれにせよ「当然であろう」では、訳として強すぎる

(モデル訳文)

* お金のとれる訳の一例。私は凝縮された短い訳を良しとしています

5000 年前に灯された科学のともしびは連綿と引き継がれ、いささか世の役に立ってきている。近年では勢いづくともしびからもらい火したロウソクやマッチがそここのありとある天然・人為の暗がり^を照らし出している。これらの事実と現代の進んだ文化状況を鑑みれば、哲学でも歴史学でも今まで衣服に関する意義づけがなされてこなかったのは、われわれ教養人にとっていまさらながらの驚きとはいえないか。

さて、これはどうだろう。ダッシュがやたらと多いが、意味するところをよく考えないと訳文に論理性・説得性がでないはずだ。訳例と解説をつけずダッシュの役割ほかいくつかだけを示しておくので、自分で苦吟して訳文を練ってほしい。

アクラム社イラスト版世界名作集『ロミオとジュリエット』解説部分

Although Shakespeare's sonnets speak about the immortality of poetry, his own writing —far from being engraved in stone or cast in bronze—was meant to participated in. It requires the contribution of actors, a director, and a living, feeling audience to make it whole.

Like any dramatic work, it is fluid—an actor or director can take it, set it in a different period, or alter it by different emphases—called “readings” in the theatre and Lit-crit business—of particularly problematic lines. And every reader can take something away that belongs simultaneously to the world and to the individual.

In Shakespeare’s case, scholars, directors, and performers have wrangled about his texts for centuries. For performances, his plays can and have been cut, one version of a line selected over another, and—sometimes— even the endings changed. Imagine, for example, a *Romeo and Juliet* or a *King Lear* with a happy ending. It’s been done.

Although Shakespeare’s sonnets speak about the immortality of poetry, his own writing 1<—>far from being engraved in stone or cast in bronze1<—>was meant to be participated in. It requires the contribution of 2<actors, a director, and a living, feeling audience> to make it whole. Like any dramatic work, it is fluid 3<—>an actor or director can take it 4<,> set it in a different period5 <, or> alter it by different emphases 6<—>called 7<“readings”> in the theatre and lit-crit businesses 8<—>of particularly problematic lines. And every reader can

take something away that belongs simultaneously to the world and to the individual.

In Shakespeare’s case, 9<scholars, directors, and performers> have wrangled about his texts for centuries. For performances, his plays can and have been cut 10<,> one version of a line selected over another 10<,> and 11<—>sometimes 11<—>even the endings changed. Imagine, 11<for example>, a 12<*Romeo and Juliet*> or a 12<*King Lear*>with a happy ending. It’s been done.

- 1 挿入句のしるし
- 2 , ,and (1,2)の並列
- 3 以下説明のダッシュ(fluidを説明)
- 4 言換えのカンマ(すなわち)
- 5 set ~ period と alter emphases を並列(同じ形で揃う)。カンマがあるのは set 以下の言葉のかたまりの区切りを示すため。「あるいは」
- 6 ダッシュの後の言葉は、直前の different emphases に掛かる
- 7 業界用語を示すクォーテーション・マーク
- 8 ダッシュの後の言葉の掛かり方は(1) set it と alter it (2) alter it (3) different emphases のうち、文脈から(3)
- 9 1, 2, and 3 の並列
- 10 節が3つ並列
- 11 挿入句
- 12 作品名

アイディ 『英文教室』 受講生募集のお知らせ

柴田耕太郎

英文を精確に読み解く語学力と論理力があれば、翻訳は自ずと出来るものと私は確信しています。

学校教育の欠陥からか、この二つを備えた翻訳志望者はせいぜい20人に1人(アルク翻訳大賞の審査経験から)。私が主宰するこの教室では徹底した精読訓練を通じ、「一点の曇りなく読み解く」技術の習得を目指します。

翻訳家志望者、翻訳書編集者、語学教員、その他卓

抜な英文読解力をつけたい社会人の入門を期待します。

9月より定数集まり次第、開講。精読エッセイ100題、出版翻訳25題、読み解きポイント50など、各種講座あり。

なお希望者があれば「本当の声に出して読みたい日本語」講座も開きます(実は私の専門は演出論で、現在某大学で「シナリオ論」を教えています)

興味ある方は下記にお問い合わせ下さい。

株式会社アイディ
柴田耕太郎 主宰 『英文教室』
事務担当 前川
TEL : 03-3357-1189
FAX : 03-3357-4489
Email : educa@id-corp.co.jp
〒162-0054
新宿区河田町 7-6、ID河田町ビル